

---

# 魔法少女リリカルなのは 転生したのはスピリット！？

ネガティブ妄想者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生したのはスピリット！？

### 【Nコード】

N5619V

### 【作者名】

ネガティブ妄想者

### 【あらすじ】

やってしまった。でも後悔はしていない。

……………嘘です。後悔してますごめんなさい。

見たい人は見てください

## 第1話 転生?.....あつそ(前書き)

やっちまりました。

でも後悔はしない。反省はしている。

.....嘘です。後悔も反省もしてます。ごめんなさい

## 第1話 転生？……あつそ

「さあ、今から貴様を転生させ      「ごふっ！！」」

俺、あおやな春とはある青柳元春の死んで最初の行為は神を殴る事だった。

まだ神を殴る数時間前。俺は普通にカードゲームをしていた

高校生にもなつてカードゲーム？  
と言われたが俺は関係なくやっていた。

「メテオヴルムでアタック！」

「ま、負けた……」

勝率はまあまあで今のバトルも俺が勝っていた。

「ふう……さすがに連続は辛いな………もう帰ってすこし寝ようかな？」

そう考えたのが間違いだったと今なら思う。

帰り道。俺は公園で楽しそうに遊ぶ子ども達を眺めていた。

楽しそうだなと眺めていたのも束の間、一人の少年がボールを追いかけて道路へ飛び出した。

一台の車が走ってきている時に

俺は危ないと思い、駆け出した。

間一髪の所で少年の背中を押して車との接触を防いだ。

だがその代わり、俺が思いっきり吹っ飛ばされた。

「がっ……く、……あ……」

地面に叩きつかれ、カードがバラまかれる

カードを回収しようとし、立ち上がろうとするが体に力が入らない。

俺はここで死ぬのかな……

まだカードゲームで遊んでいたかったな……

そう思いながら俺の意識は途切れた。

気がつくとは何故か白い部屋のようなところにいた。

「……………」

そして目の前には腕を組んで俺を哀れんだ目で見てくる爺さんがいた。

誰だ？と聞くと神と答えた。

「……………」

「……………」

「……………えっと、すまぬ」

お互い黙って見つめ合っていると神が喋り出した。

「何で謝るんです？」

「いや、貴様が死ぬのは間違いじゃったからな……………」

「は？間違い？」

「なら……………」

「本当はあの子どもが死ぬ予定だったと？」

「いや、それも間違いじゃ。本当はあんな事態になるのが間違いなのじゃ」

「え……………っと、つまり？」

「実はわしのミスでこんな事になってしまつてな。おまえは死ぬ必要はなかったんじゃないが……すまんかったな」

とりあえず理不尽に死んだ時にしたい事ベスト1をしようと思う。

「まあ、さすがに間違いで死ぬのはかわいそうじゃから転生させてやろう」

神がなんか言っているが俺は無視して拳を握り、力を込める。

「さあ、今から貴様を転生させて「ざっけんなー!」「ごふっ!」

俺は神の顔面に拳を叩き込んだ。

おお、いい感じで決まつたな

そう思っていると神がよろよろ立ち上がった

見た感じがかなり弱ってるな……

「うおい！何故殴つた！？痛かつたぞ!？」

「神よ……知らないと思うが俺の知ってるアニメには理不尽に死んだら神を殴るという鉄則があるんだ。俺はそれを全うしたまで」

「どのSSSじゃ……」

おお、この神、知ってやがった

「それより転生じゃ……行き先はランダムで決めるからの?」

「了解した」

殴ったし、それでもいいや

「んじゃ、願いを3つ言え。出来る限り叶えてやる」

どこの竜の玉の龍だこの神は……  
それにしても願いか……なら……

「バトルスピリッツって知ってるか?」

「あのカードゲームの事か? まあ、知らぬこともない」

知ってるのか……なら

「ならヴルムと名の付くスピリットに変身する力とそのスピリット達の力が欲しい。  
カードバトラーとしては変身してみたいし、変身だけじゃ物足りないし」

「わかった。次は?」

次は………

「思いつかないな……」



「取り消すか？」

でもそれは惜しい。  
だったら……

「転生する時はこの姿のままでいい。この姿で生きていたいしさ」

「イケメンにしてやるぞ？まあ今もそんなに悪くはないが」

「自分からリア充になる気はないから。俺は流されて生きるタイプだし」

「勿体無いのお……………」

うるさいわ。

最後は……………

「生きてた頃の記憶を消してくれ。今の記憶は消さなくていい」

「貴様、本当に変わり者じゃな」

「だって転生した後カードゲームしたくなったら困るじゃん。だったら消した方がマシ」

「むう…………それもそうじゃな。なら転生後は生前の記憶がないようにしとくぞい？」

「頼む」

これで俺のカード欲が消えるな。

「あ、一番最初の願いじゃが……ちと時間がかかる部分があったわい。  
だから最初に使えるのはジークヴルムだけになりそうじゃがいいかの？」

「いいよ。後から段々使えるのが増えるんだよね？」

「そうじゃ」

「ならOKだ」

別に困る程じゃないし……

「ほいじゃ……そろそろ転生させるかの」

お、そろそろか……

ん？どう転生させられるんだ？

「んじゃ……グッドラック」

パチン、と神が指を鳴らすと俺の足元に黒い大きな穴が空いた……

つて、ええ！？

「だがしかし！」

ぱしっ、と穴の端に手を掛ける。  
だけど……

「早く行かんか」

げしっ、と手を蹴られた。

「何っ!?!.....木いいいい あああっ!!--!!--!」

どっかのロリコンのような叫び声を上げて穴へと落ちて行った。

神side

「ふう、やっと行ったか」

全く.....誰が 原じゃ、誰が.....

「しっかし面倒な願いをきいたのお.....さて.....あやつはどの世界に行ったかの?」

何々?リリカル?なのは?

.....ざまあ

「ならデバイスで変身できるようにしとこつかの.....」

神side end

第1話 転生?.....あつそ(後書き)

やっちゃった.....

では!!

**第2話 転生完了！第一遭遇者は車椅子の美少女！？（前書き）**

やっちまったパート2

ちなみにタイトル通りあの人出ます。

ではどうぞ。

## 第2話 転生完了！第一遭遇者は車椅子の美少女！？

「フ エノキ ミ、あああ~~~~！！！」

俺は今、背中から落ちている。

なぜかって？

前回を見てくれ。

そして余裕なんてない。ホントだよ？

「ぐふっ！！！」

しかしそんなに高くなかったのか、  
軽く背中を強打して呼吸困難で済んだ。

いや、そんなに軽くないけど……

「げほっ！……………」

「どないしたん？大丈夫？」

っ！？

聞き覚えのない声が聞こえた！？  
しかも女の子の声！

だけど苦しくて目を開けられず、見えないでいた。

「くっ……………ぼあっ！！！」

苦しい思いするのを覚悟して、  
変な掛け声と共に起き上がった。

「きゃっ！」

「ぐうう……………い、痛い……………」

かわいらしい悲鳴が聞こえたが  
今の俺には振り向いてる暇がなかった

「えーっと……………一応聞いとくけど……………大丈夫？」

「大丈夫じゃない……………大問題だ……………」

多分かなり涙目になってるだろう。  
かなり涙声になっている。

「ほんなら家に入る？」

「……………お邪魔します……………」

誰だか知らぬが親切だ。  
そう思いながら顔を上げる。

目の前には栗色の髪のショートヘアーに×の形の髪飾り？をして  
車椅子に乗っているかわいらしい女の子がそこにいた。

「私は八神はやて。 ひらがなではやてやおかしいやろ？」

俺達は今、テーブルに向かい合って自己紹介をしていた。

「いや、おかしくないよ。

俺の名前は青柳元春あおやなぎもとる

元氣の元に春と書いて元春」

「ほんで元春、何でこんなところにいたんや？」

こんなところ、というのは

実は落ちたところが八神さんの家の庭だったのだ。

八神さんは俺が落ちてきた音を聞いて駆けつけたという。

車椅子で無茶すんなよ……

「実は何も気が付いたらここにいた……しか言えない」

「ふうん、まあ、ええわ」

おろ？ 以外に追及してこないな？

まあ、好都合だが……

「で、この辺りに住んどるん？」

……ヤバス……… 実は俺……嘘つくの苦手なんだよ……



言ってもすぐバレるし……………どうしよう？

「ごめんなさい。この辺りの事全然知らないし、多分他の所はまったくご存知ないです」

考えた結果、素直に喋った方が楽と思い、素直に白状する。  
……………嘘は良くないもの……

「そんならどうやってここに……………まあ、ええわそんなら元春は行くところが無いんやな？」

うおっ、いきなり呼び捨てか！？  
別に構わんが

「うん、微塵もない」

「堂々と言う事ちゃうんと思うんやけど……………」

「はっはっは 自分、バカですから！！」

「自分でバカって言うてて悲しくないんか？」

悲しい？H A H A H A……………はい、悲しいです。

「行くところ無いんやったら……………家に住まへんか？」

「へ？（・□・）」

「なんやその顔……………いやなんか？」

いやいやんな訳ないが……その……な？

「いいのか？車椅子に乗ってる女の子がこんな得体の知れない男と同じ屋根の下で暮らして？」

「自分で言つてホンマに悲しくないんか？

……でもそこんところは大丈夫や。元春は変な事する人には見えへんし」

遠回しにヘタレって言われてね？俺

「それに家には私しかおらへんし……」

「……………」

……………やべえ……………気まずくね？

俺ってばこういう暗いのも駄目なんだよ！！

何か……………この空気を明るくする方法は……………そうだっ！！！！

「八神さん！」

「？」

名前を呼ぶと八神さんは顔を俺に向ける。

今だ！！！！

「（ー3ー）」 変な顔

「……………」

……………スベツたあああ!!!!!!

『両手で顔の端をうにゅんして笑わせる作戦』がスベツたあああ  
orz

「……………ぷっw」

ん？

「あははははっwwwwんやその変な顔wwwあは、あははははは  
っ」

……………良かった……………なんとか笑ってくれた。

そう思いながら俺は八神さんの頭を撫でる。

「本当にここに住んでいいのか？」

「うん。ええよ？その代わりちゃんと働いてもらっで？」

そんな事は百も承知だ。

「なら……………よろしくお願いします。八神さん」

「……………はやてや」

「え？」

「もう家族なのに名字で呼ぶん？」

そういう事ね。

いきなりの言葉で理解できなかったが  
ようやく理解した。

「んじゃ、改めてよろしくな？」はやて」

「うん、よろしく」

こうして俺は八神家で暮らす事になった。

「元春side end」

「神side」

「え〜つとここをこうしてこうなつて？」

わしは今、あの小僧のデバイスとやらを作っていた。

神だから摩訶不思議な力でさくつとやればいいじゃない

……って思っやつもおるんじやろうが

わしってそんなになんでもできる方じゃないのじやよ

……

確かに全知全能の神ならこんな事は簡単じやろうがわしはそっち系の神じゃないからのお……

「よし、できた」

なんとかデバイスを完成させる。

ちなみにインテリジェントデバイスじゃ。

後は機能とAIがちゃんと正常に起動するかどうかじゃが……

わしはデバイスを起動させる。

《……………》

……あれ？失敗したかの？

《……………あなたが私のマスターですか？》

こいつ！喋るぞっ！

いや……………まあ、成功したら喋るのは当然なんじゃが……

「いんや、違うぞい。それよりどうじゃ？どこがおかしな部分はな  
いかの？」

《あなたの顔と体型がおかしい以外は何ありません》

このやろっ……………いや、このデバイス……………かなりむかつく……

「わしの外見では無く、おまえの事を言っとるのじゃが……………」

《それは問題ありません。全システム正常です》

「”スピリットシステム”もか？」

《はい。問題なく発動できます。

……ジークヴルムと

のみですが《

まあ、その所は仕方ない。

他のスピリットとはある事情で時間が掛かるからの

はわしからのお節介みたいなもんじゃし……………

「他のスピリットは後からで良い。それらに変身できるだけでもいいはずじゃからな」

《はい。で、私のマスターは何処に？》

「大丈夫じゃ。ちゃんとあいつの元へ送ってやる。

……………あつちの世界の宅配便で」

《あなたは本当に神様ですか？》

わしが神ってわかってたんかい。  
というか

「どいつもこいつもわしが無能だと思ってるらしいのぉ」

《それはあなたが神様だからですよ？》

「まあ、良いわ。

んじゃタイミングの良い時におまえをおまえのマスターの元へ送るからの」

《了解しました》

デバイスの返事を聞き、わしはどのタイミングで送るのが良いか考え始めた。

「神side end」

**第2話 転生完了！第一遭遇者は車椅子の美少女！？（後書き）**

はやての言葉とかその他もろもろこれでよかったかな？

何かあれば感想ください。  
そっごく編集しますので。

では。



第3話 八神家一日目 「止めて、はやて！俺のLPはもう無いよ！？」（前書

はっはっは。

この小説もここまで来るとさすががしい。

タイトル通り？元春が八神家に住んで一日目の日常を書いてみた。

ではどうぞ～

第3話 八神家一日目 「止めて、はやて！俺のLPはもう無いよ！？」

元春side

俺が八神家の一員になって初めての朝。

カーテンの隙間から注がれる日差しで俺は目が覚めた。

目覚めた俺は隣に人の温もりを感じた。

布団を捲るとそこには……

すやすやと眠るはやてが俺の腕に抱きついていた。

110番に電話をかけようとする人！

待ってくれ！おれば無実だ！

昨日の夜にはやてに

「一緒に寝てくれへん？」

って言われたから寝てるだけだ！！

俺だって何でか聞いたけど……………

「ええやん。家族なんやし／＼／」

何回聞いても顔赤くしてこればっかだったんだ！！  
信じてくれ！！

「って俺は誰に言い訳してんだろ？」

とりあえず今日はこの街をはやてに案内してもらうつ予定だ。

今の時間は 10時か……………そろそろ起きないと自堕落になっちまうから起こすか……

「おゝい、はやて？起きろ〜」

体を揺すって起こそうとする。

ちなみに触ってるのは肩だからな？

しかしはやては起きる気配すらない。

「さっさと起きろってのっ！ていつ！」

今度はでこピンで起こしてみる。

「……………ん、うん……………」

……………そんな声出さないでもらえます？はやてさん？

一緒に寝てるだけでも俺のLPがガリガリ削られてるんですから……

……

「うん？朝〜？」

はやてが寝ぼけ眼の状態を目を覚ます。

「おはよう。はやて」

俺ははやてに朝の挨拶をする。  
するとはやては……

「……………（きゅっ）」

無言で抱きついてきた。

ってヴオオオオい！！！！

止めて！俺のLPはもう0なんだ！

「人の体温や……………」

抱きつかれて慌てていた俺ははやての一言で言葉が出なくなった。

そういえばはやての両親ってもう……………

止めだ止め！暗い空気は嫌いって言っただろ！

そう思いながらはやての頭を撫でる。

ちゃんとここにいるよという意味を込めて

「……………ふふっ」

撫でていると微かにはやてが微笑んだ気がした。

時は進み、昼となる。

結局、はやてが起きたのは11時半となっていました。

本人曰わく……

「なんか落ち着いて眠れてもうて……」

と、なんか訳のわからん言い訳をされた。

今ははやてが昼ご飯を作るのを手伝っている。

「元春。あれ取って？」

「ごめん。どれ？」

「塩や」

「どれが？」

「青い蓋の奴や」

「これか……はい」

「あんがとな」

………手伝ってるはずだ……。

いや、むしろ俺邪魔か？

「はやてさん？何か俺に手伝える事は………」

「うん……無いな」

………どうやらキッチン内で俺が手伝える事はなかったみたいだ……

o r z

昼ご飯も完成し、テーブルに座り、はやてと向き合いながら食べ始める。

途中であゝんする？とか言われたが拒否した。

朝と昼ご飯準備の時間でLPがマイナスになったのにこんな事したら死ぬるっての…………

ちなみにはやての料理は美味でした。

ご飯も食い終わり、食器の片付けも済ます。

いよいよ待ちに待った街の案内の時間。

はやても行く準備ができたのか  
玄関で待っていた。

「元春？早くしいや？」

「おう、今行く」

そしてはやての車椅子を押して外へ出る。

外ではキラキラと太陽が輝いていた。

「さて、元春はどこ行きたい？」

「そうだなあ……」

買い物の為にスーパーとか商店街とかに行きたいな……

でもそれ以外にも色々な場所も覚えたいし……

「はやてと一緒に行けるとこでいいや」

「……………／／／」

考えるのも面倒になり、適当に答えた。

何故か後ろから見るはやての耳が赤くなってるが……

とりあえず最初は近くにあるというスーパーに向かう事にした。

向かう途中で公園や病院などの公共の場所を教えてもらったり、『翠屋』というお菓子が美味しいらしい喫茶店を教えてもらった。

そんなこんなでスーパーに到着した。

「あれ？元春？まだお醤油ってあったっけ？」

「ん？……確かなかった気がする」

車椅子を押しながら買い物をする。

何かそんな日常の風景が今の俺にはちょっと嬉しかった。

「あら？ご兄妹きょうだいでお買い物かひのもの？微笑ましいわねえ」

買い物サクサクとしていると

同じく買い物をしてるらしい主婦からなんか言われた。

ん~~~~……こんなのが兄でもはやてが困るよな？

よし、ここは違うと言おう。

「ああ、いえ、ちがー（ぎゅっ）がああああっ！……！」

違うと言おうとしたらはやてが車椅子を押してる俺の手を思いっきり抓ってきた！？

富士山を喰らいたくないくらい痛かったよ！？

何！？俺は何を間違えたの！？

「…………（にににに）」

……めちゃくちゃ期待した目というか笑ってない笑顔というかなんかはやてがめっちゃ俺を見てるんだが…………

「あら？兄妹きょうだいじゃないの？」

「あ、はい。そうだ（ゴンッ）でええええええっ！……！」



今度は牛乳パックで手を叩かれたよ!?

何故に!?! 何故にはやては俺の手を殴るの!?!

そんな俺とはやてのやり取りを見てか、主婦は微笑みながら俺から遠ざかっていった。

「あの……はやてさん？」

「……………」

買い物の帰り道……はやてがわからんが拗ねていた。

はやてが俺に態度変えたのって買い物の時だったよなあ……………

何が駄目だったんだろ？

「……………なあ……………元春？」

考えていると不意にはやてが話しかけてきた。

「な、なんだ？はやて」

「元春は兄妹きょうだいに見られたくないん？」

は？兄妹？  
きょうだい

「私きょうだいな？兄妹に見られて嬉しかった……  
元春はうちの兄さんになりたくないん？」

……ああ……あの時の事で拗ねてたのか……

でもな？

「俺なんかが兄でいいのか？  
会ったのも一緒に住み始めたのも昨日が初めてだったし」

「別にええんよ？兄妹きょうだいってどんなものか知りたかっただけやし……  
元春が嫌なら別に………」

あるえ？まったく聞く耳持たへんの？  
どうやらもう俺には兄になる／ならないのどちらかを選ばないとな  
らないらしい。

はやてはなつて欲しいらしいし、別に俺はなつてもそんな問題ない  
し……

仕方ねえ……

俺ははやての頭に手をやる。

「元春？「元兄もとにいな」えっ……？」

うむ、良い具合に混乱してるな。

まあ、冗談は置いて……

「兄妹きょうだいがいいんだろ？ならそう呼べ」

かつこつけてそんな事を言ってみる。

「元もとh「元兄もとにい」……うん、元兄もとにい！！」

そんなこんなではやては帰り道で「元兄、元兄！」と家に着くまで言い続けた。

まあ、嬉しそうに言うのですべてに返事をした。

しかし、俺は甘かった。

これのせいではやてがあんな事をするなんて思ってもなかった……  
……

（カポンっ）

今俺は風呂に入っていた……

いやぁ～お風呂って落ちつきますよねえ～

「元兄～、頭洗って～」

……はやてと一緒に入ってなかったら……

はいっ！朝みたいに110番しようとしてる人！！  
言い訳っぽいけどこれも俺は無実だっ！！

風呂に入ろうとしたらはやてが

「一緒に入ってくれへん？」

って上目使いで言ってきた……  
でもそれには負けなかったんだ！  
それは駄目って強く言っただけ……

「元兄は……うちの事……嫌いなん？」

って泣きだしそうになったんだよ！！  
負けたよ！昨日は車椅子でも風呂入ってたから大丈夫と思ってたら  
これだよ！チキショーっ！！

あ、あとちゃんとお互いバスタオルは巻いてるからな！  
それを条件に入るのを許可したんだから

「元兄いゝ、はよしてゝ」

「はいはい」

まあ、マジで妹って思えば変な気は起きねえか……

そんなこんなので大慌て（俺だけ）の風呂が終わり、  
就寝に入る訳なんだが……

「はやてさん………今日もですか？」

「え、ええやん。兄妹きょうだいなんやし／＼／」

昨日は違う理由で寝かされたんですが……

反論しようとしたがはやてがすでにベットに入り  
左手で開いてるスペースをペチペチ叩く。

完璧にこっちに來いの合図だね？これ………

「はあ………」

俺は諦めて、ベットに入る。

この時はやてがめっちゃいい笑顔だった。

………俺のLPはもうぶっ壊れたからもういいや………

「そんじゃ、元兄。おやすみな」

「ああ、おやすみ」

お互いにおやすみの一言を言い、眠りにつく。

ちなみに俺ははやてが熟睡した11時にやっとの思いで眠りにつけた。

……明日もこんなにか？と思うと急に悲しくなってしまった。

けど……はやてが喜ぶなら少しくらいはいいかなあ、と思いながら意識を睡魔に明け渡した。

第3話 八神家一日目 「止めて、はやて！俺のLPはもう無いよ！？」（後書

……俺やっちまった？

駄文過ぎね？飛ばし過ぎじゃね？あと変じゃね？

こっ、色々と……………

さてこの幸せ主人公？をどう思う？

俺はイラつき以外のモンが出ないさ……………

では気になるとこや誤字、脱字や良いところ（多分無いが）がありましたら

感想くださいませ。

では。

第4話 はやての誕生日！おめでとう！でもなんか胸騒ぎが……（前書き）

駄文ですが見てください。

あとはやてがなんかデレデレ？ですがスルーしてください。  
あと3話から数日経っています。

では始まります。



第4話 はやての誕生日！おめでとう！でもなんか胸騒ぎが……

「ううん……」

今、私<sup>わたくし</sup>青柳元春は喫茶翠屋でケーキを選んでいた。

何故なら今日ははやての誕生日。

仮にも兄の俺としては祝ってやらないと思ひ、  
選んでいるのだが……

「どれも旨そうだな、おい」

と、こんな感じでケーキを決めれないでいた。

だってはやてに美味しいケーキをプレゼントしてあげたいじゃん……

そう考えて唸っていると……

「何かお探でしょうか？」

店員さんに声を掛けられた。

「あ、えっと……実は妹が今日誕生日なんでケーキを買いに来たんですが……」

オススメってありますか？」

とりあえず聞いてみる。

悩んでても多分決めれないし店員のオススメでいいか……

「ならこのショートケーキとかはどうでしょう？」

店員がケーキに指差す。

ショートケーキか……まあ、シンプルなのもいいかな……

「ならそれをホールでください」

「はい、少々お待ちください」

そして待つこと五分。

「お待たせしました

1800円になります」

「はい」

お金を差し出し、ケーキを受け取ると

俺は店を出て行った。

家に着くとはやてが料理を作って待っていた。

……………あの……………はやて？

「ちょっと多すぎじゃありません？」

はやての作った料理は

大きめハンバーグ×3（俺の所に）

ナポリタン大盛（俺の所に）

ご飯山盛り（俺の所に）

「いやあ……………今日わたしの誕生日やん？せやから多めに作ってもうて……………」

何故自分の誕生日に料理を尋常じゃねゝ量作って俺に食わせんだよ

……………

そっちはやては普通の量だし

「それとも元兄は私の料理、食べたくないん？」

はやてが涙目でこっちを見てくる……………

「……………食います……………」

俺はそれに負けて、

この料理の山を食うことにした……………

「ぬお…………く、食ったど…………（がくっ）」

なんとか二時間かけてあの量を食い尽くした。

食ってる最中、はやてがいちいちこっち見るから食べ難かったがなんとか乗り切った。

「お粗末さまでした」

にこやかにはやてが言ってきた。

まあ、はやてが良いなら良いのだが…………もうさすがに腹がヤヴァい

……………  
さっさと風呂に入って寝よ。

「んじゃ俺、風呂に入って寝るから」

そうはやてに伝えて風呂場に行く。

「あ、ほんなら私も」

（ズコッ！）

あまりにもさらっと言つのでずっこけてしまった。  
いや、ちょ、この子大丈夫？

「はやて、ちよつと待て」

「ん？なんや？」

「とりあえずリビングで風呂に入る準備するのは止めようか……  
ほら脱ぎかけの服を着る！」

「ぶー」

初めて会った時からこんな子だったか？

はやてが服を着てからふとそんな事を考えてしまった。

……うん、おかしくなったのは俺が家族になってからじゃん……

前置きでも書いてる通り、あれから数日経っている。

その日からずっとこんな感じで一緒にお風呂を要求されてしまっている。

一緒に寝るのはまだ許せる（おいっ）

しかし兄としていつまでも許してられない

ここはガツンと言わないと……

「なあ、はやて」

「なんや？」

「あのかな？いつまでも一緒にお風呂つていけないと思うんだ……」

「なんでや？」

「な、なんでやって……はやてだって年頃の女の子だし……俺だって健全な男なわけで……」

「……私は平気やで………／／／」

止めて！顔を赤くさせないで……！

「いや、はやてが平気でも俺がなっ？」

「元兄は私と入りたくないん？」

涙目と上目使いで見つめてくるはやて……

「ううう………」

さあ、ここで俺の選択肢

1：はやてを突き放す。

2：一緒に入る。

1は完璧はやてを泣かせてしまう……それは避けたい。

2は多分これからもずっと続いてしまう。

そうになったら俺のライフは完璧塵も残らないだろう……

どうする……俺……！

「俺は………無力だ……」

男って弱いよね……

結局一緒に入ってしまった。

はやてはにこにことして嬉しそうだが

俺は風呂上がりと思えないくらいドヨォンとした顔をしているだろ……

「はぁ……ん？」

時計を見るともう0時になりそうな時間だった。

むう……はやてを夜更かしさせるのも駄目だしもう寝るか……

「はやて……寝るぞ……」

「は……いつ」

風呂上がりの牛乳を飲んだのか口を白くしてはやてが来た。  
仕方ないのですぐそばにあったティッシュで口を拭いてやるとまた  
はやてが顔を赤くした。

最近やけに顔を赤くするなあ……………

しかし、俺はこの時少し胸騒ぎがした。

その正体がわかるのはすぐになるとも知らずに  
俺ははやてと部屋に入って行ってしまった。



第4話 はやての誕生日！おめでとう！でもなんか胸騒ぎが……（後書き）

駄文過ぎるね！

さあ、次回はあの四人（うち一人は一匹と数える）が出るよお

……文才上がる超能力が欲しいなあ……レベル5くらいで

ではアデユ　　&グッバイ！

第五話 ヴォルケンスが家族入り 俺は不幸まっしぐら (前書き)

やっちゃったかのような適當っぷり……

でも見てくれる方がいるのが嬉しいです。

## 第五話 ヴォルケンスが家族入り 俺は不幸まっしぐら

俺は今、只今変な場面に直面しております。

「きゅ……」

横には気を失って倒れこんでいるはやて

そして目の前には変な黒い服を着た2人の女性と1人の女の子と犬耳？1人の男の四人が跪いている

多分第三者が見たら

「失礼しました」

とか言いながら逃げ出すほどカオスだろう

とりあえずこれだけ言っておこう。

「なんじゃこりゃ……」

はやての誕生日を祝って、そしていつものように敗北した後いつものように寝るはずだった。

しかし、部屋に置いてあった時計の針が12時を指した時……事件

は起きた。

部屋が突然揺れ出し、

はやての机に飾ってあった怪しげな本が輝き、浮きだした。

そして

と、まあここまでの説明はこんな感じになる。

目の前で跪いているのはヴォルケンリッターという集団（こんな表現で良いだろう）らしい。

そしてこいつらの言う”主”とははやての事だろう。

あの本ははやてが物心ついた時から持ってたやつらしいし、本がはやての前で起動したのが決定的だろう。

こんな事考えていると跪いていたはずのヴォルケンリッターの赤い髪の子が俺の前にいた。

「……………」（じー）

無言でずっと俺を見つめてくる。

何か言わなきゃならんのだろうか……

「おまえ、誰だ？」

「えっ？」

考えているといきなり女の子が話しかけてきた。  
すると女の子の声を聞いてか

「なっ！？ヴィータ。無礼だぞ」

「そうよ、ヴィータちゃん。私達の主かも知れないのに……」

他2人も言葉を発した。

男は一切口を出していない。

なるほどこの赤い髪の女の子は「ヴィータ」って言うのか

「初めまして、ヴィータ。俺は青柳元春  
訳あって君の主、はやての兄をやってる者だ」

はやてを指さしながら自己紹介する

「……」

三人はまた黙り出してしまった。

まあ、自己紹介は済ましたし  
はやてを介抱しに居間へ連れて行くか

はやてを抱きかかえ（俗に言うお姫様だっこ）てはやての部屋を出ようとする

「どこへ行く」

と、部屋を出るのを

ピンクの髪的女性に遮られてしまった。

「どこって、居間に行くんだよ」

「何故だ。何故主を連れていく」

ああ、こいつ

はやてが気絶してるの気づいてなかったのか？

「気絶してんだよ。早く起こして状況を説明しないと」

ぶっきらぼうに答え、さっさと居間へと向かった。

「この子が闇の書つてもんなんやね」

はやてを起こし、さっそく状況を説明した。

以外にもはやてはすんなりヴォルケンス（長いので略す）を受け入

れた。

まあ、はやてなら……と思っていたし、なによりはやてがどこか嬉しそうだった。

話を聞くと、守護騎士は闇の書の主（現時点でははやて）を守るのが使命らしい

そして闇の書の主は守護騎士の衣食住を管理する必要があるらしい（はやて談）

とりあえず面倒事ははやてに任せよう。

……手助けはするつもりだけど

「（しかし部屋の隅で様子見てるけど色々おもしろいなあ）」

はやてが住むのに必要な服を買うためにサイズ測るって言ったらポカーンとした顔になるし、今までの主はなんだったんだよって言いたくなるほど面白かった。

名前もちよつと面白い。

ピンクの髪の女性はシグナム

金髪の髪の女性はシャマル

赤髪の子はさつき聞いた通りヴィータ

そして本人に聞いたが狼の耳を付けてるのがザフィーラらしい

こいつらを家族にするなんて本当にはやては面白い子だと思った。  
ただ……

「ただ女物の買い物に狩り出されるとキツイものがある……」

サイズを測った後、買い物に出たは良いがヴォルケンスは大体は女性。

つまりは女性／女の子モノの服を買ったために下着やら婦人服のコーナーに行かなければならない

今の状態のヴォルケンスを連れて行くと面倒事が起こるので  
買い物は必然的に俺とはやてが行く事になるのだが……………

「でもな？人はいつか行かならん所があるんよ？」

だからと言ってはやては俺の腕を引っ張り、  
下着のコーナーに引きずり込もうとする。

「いやいやっ、ちょい待て！はやて！俺はまだ青春真っ盛りの高校生であつてだな！」

「大丈夫や、私もおるんやし……………」

いてもいなくても下着コーナーは他の客から酷い眼差しが来るんだよ！

「もう、観念しいや〜」

ぬおっ！？俺が引きずり込まれている！？

はやてのどこにそんな力が……………ってヤヴァい！

下着コーナーの中にお客が俺をがつつり睨んでる……！！

「はやて！お願い！マジでまずい……………」

「とりや〜〜〜」



「ぬあああつ！……！」

最終的に入ってしまった……  
こんな感じで俺のヴォルケنزの為の買い物は災厄な感じが始まった。

女性客と店員の恐い眼差しを受けつつ、買い物は無事終了し、  
はやての家へと帰宅しヴォルケنزに買った物を届けた夜……

「むりゅ……」

俺はいつも通り風呂に入っていた。

さすがにヴォルケنزという新しい家族ができたのだから  
一緒に入るのを自重してくれと言ったらふくれっ面になりつつも諦  
めてくれた

「はあ、一人で風呂って何でこんなに気持ちいいんだろう」  
そんな事をぶつぶつ言っていると

「……ちょ………て、まず……」

「え……から……か……」

ドアの向こうからはやてとヴィータの声が聞こえた。  
何か嫌な予感が……

「おっじゃまっします」

思いつきり当たった

はやてがヴィータにおんぶしてもらいながら（ヴィータは大丈夫なのか？）

ドアを開けて入ってきた。

しかも身につけてるのは2人ともバスタオル一枚

「え、ちょ、何で」

諦めたと思っていたのにと茫然としていると

「だって……我慢できひんかったんや」

「はやてがどうしてもって／＼」

はやては訳のわからん事を言い、ヴィータは顔を赤くして理由を述べた。

この後は仕方なく入ったが

後からシグナムに思いつきり制裁を何故か受けてしまった。

とりあえずこれだけ言わせてくれ……

「不幸だ……!!!!」

そんな言葉が八神家に響いた。

第五話 ヴォルケンスが家族入り 俺は不幸まっしぐら (後書き)

適当過ぎますよね！？これ！

笑えばいいじゃない！

もう高らかに！見下すように！

あゝっはっはっはっはwww

……って自虐はこの辺りにして  
感想がございましたらください。

第6話 八神家の日常 あれ……平和かも……（前書き）

久しぶりの投稿です。  
見てもらえたら幸いです。

第6話 八神家の日常 あれ……平和かも……

俺、青柳元春は今窮地に陥っていた……

「さあ、覚悟しろ！元春！」

まさかのシグナムに

剣道とかでよく見かける木刀を向けられていた。

いつも思う……

どうしてこうなった……

発端はヴォルケンズが八神家に住んで  
数日経った朝……

珍しく早く起きた俺は  
たまにははやての代わりに朝食を作ろうと  
着替えてキッチンに向かっていた。

「ん？」

居間に入ると外から素振りの音が聞こえる。

カーテンを開けると、

「む、元春か……今日は珍しく早いのだな………」

シグナムが木刀を持って素振りをしていた。

「そういうシグナムも早いんだな」

「私はいつもこの時間には素振りしている」

時間を確認すると6時12分くらいだった。

着替えて歯を磨いて髪を整える時間を考えると

シグナムは大体5時45分くらいに起きているんだろう。

いつもの俺には絶対無理だ。

「今日のはやての代わりに朝食作ろうと思っただけど、シグナムは何がいい？」

「主と同じものを頼む」

「いや、できればシグナムの意見を聞きたいな〜………」

「特に無いな」

即答しやがった………

少しくらい考える動作が欲しかった………

「んじゃ、焼き魚定食みたいな作るか………」

俺はキッチンに入り、  
シグナムは素振りを再開した。

数十分後

味噌汁を作っていると  
はやてが起きてきた。

「おはよう。元兄」

「おはよう、はやて。」

もう少して朝食できるから待ってろ」

「あれ？元兄って料理作れたん？」

「ある程度は作れる。」

ただレパートリーはあんまり無いし、  
はやての料理の方が旨いから普段作らないだけ」

転生前はよく家庭の事情で朝昼晩と飯は自分で作って食べてたからな  
そこそこ旨いはずだ

「楽しみやな。元兄のごはん」

「あんまり期待するなよ？」



はやてがキッチンを出ると今度はヴィータが入ってきた。

寝ぼけているのかフラフラしてる。

「おあよ……………」

…………訂正。完全に寝ぼけてる。

「ヴィータ、眠いなら無理せず寝てこい。

朝食はもうすぐできるけどお前の分は暖め直してやるから」

「わかった…………ふあ……………」

コップを取り出し、牛乳を注いで飲んでから  
寝室に戻っていった。

朝食が出来上がる頃にはヴィータ以外みんな起きてきていた。

朝食は焼き魚（鮭）と味噌汁とご飯。

定番の朝食だ。

それをテーブルに並べてみんなはそれぞれ指定の椅子に座る。  
（はやては車椅子だから座るといふ表現はおかしいかな？）

ザフィーラの朝食は

『猫まんま』という味噌汁にご飯を入れ、お粥っぽくしたものだ。

それに鮭をぐちゃぐちゃにして入れた。

「それじゃ、いただきます！」

その一言で八神家の1日が始まった

「さてと……………何しよう……………」

朝食を終えた後、

「片づけは私がやるから元兄は休んでて」

と、はやてが言ってくれたので  
部屋でごろごろしていた。

うゝん……………

洗濯はシャマルさんがやっているし、  
お風呂掃除も昨日の深夜にしておいたし……………

なら朝風呂にでも入るかな。

いつも風呂となると

はやてが入ろうとしてくるからな  
たまには一人で入りたい……

そう思っていると

いつの間にかお風呂の湯を入れていた

無意識って怖いな……

「ん？もう風呂にするのか？」

不意にシグナムが話しかけてきた。

「いや、入りたいな、って思ってたらしいの間に入れた」

「……そうか、なら私も入るとしよう。

素振りをしている時に少し汗を掻いたからな」

「別にいいけど……

最初は俺だぞ？」

「なんだと……」

シグナムが俺を睨んできた。

あれ！？俺なんか言っただけ！？

「私は汗を早く流したいんだ。だから譲ってくれ」

ああ、シグナムは最初に入りたいのか

確かに風呂はいつもシグナムが最初に入ってた気がする。

よし、なら……

「断る」

「なっ!？」

いつも最初に入ってるならたまには譲って欲しい。

それにはやても食器の片づけをしているから

まったりと入るのは今しかない!!

「な、なら私と勝負しろ!元春が勝ったら風呂は譲ってやる!」

「おしつ、乗った!

負けても恨むんじゃないぜ?」

そして冒頭のようになる。

場所は庭で、

勝負の内容は『先に一撃を当てた方が勝ち』  
というルールになった。

武器は木刀のみで

庭からは出れないルールも取り付けた。

「では行くぞっ！」

そしてシグナムとのバトルが始まった。

うん。

今更ながらめっちゃ後悔してる。

だって剣術でシグナムに勝てるわけないもん……………

風呂は譲れば良かったとしみじみ思いながら  
俺は木刀を構えた。

第6話 八神家の日常 あれ……平和かも……（後書き）

元春に平和などあるものか      っ！！

次回はバトルの回です。

早くスピリット出さないとな……

では感想や指摘がございましたらください。  
では

シグナムと勝負！？なら……エスケープっ！！（前書き）

更新遅れてすいません！

理由は色々ありますがすいません。

ではご覧ください。

シグナムと勝負！？なら……エスケープっ！！

木刀を構え、突っ込んでくるシグナムから俺は必死に逃げていた。

いや、スタコラサッサの方じゃなくて

とある最強の弟子みたいにかわしてるだけだよ？

「って、うわっ！？シグナム！今本気で仕留めようとしたろ！？  
シャツがちよつと破けたぞ！？」

「私はいつでも本気だ！元春！  
逃げてないでお前も覚悟を決めろ！！」

なんの覚悟をしろって言っくんじゃ！！  
死か！？死ぬ覚悟しろって言っのか！？

つか、最初の頃とキャラ変わってませんか！？

「はあっ！」

「ぬおっ！？」

シグナムが振り上げた木刀を避けたら  
転けてしまった。

やばっ！

シグナムが不適に笑い、木刀を振り上げる。  
すぐさま立ち上がるが避けるまでは間に合わない。



仕方ない……………  
こうなったら

「はっ！！」

シグナムが木刀を振り下ろす。  
俺が避ける事ができないのを確信したのか  
勝利の笑みを浮かべる

だがしかしっ！！

「なん、と            っ！！」

ガンっという音と共に  
木刀と木刀がぶつかり合った。

「なっ！？」

勝利を確信していたのかシグナムは驚きを隠せない様子だ。

……………うん。防いだ俺が一番驚いてる……………  
まさかマジで防げるとは思ってた。なかった。

俺は一旦距離を取り、構える。

このままじゃ終わる気がしない……………ダメ元でやってみ  
るか……………

「たあっ！！！」

俺は木刀を前に突き出し、シグナムに突っ込む。  
それをシグナムはひらりとかわす。

ですよね〜

素人の剣がシグナムに当たるはず無いって……

「ようやくやる気になったか……  
では行くぞ!!」

「っ!?!」

シグナムの剣捌きが再び俺に襲いかかる。  
攻撃がまったく目では確認できない。

とある赤い機体に乗った仮面の男のように見えるようになる訳も無く  
すべて勘でギリギリかわすのが精一杯だった。

だがかわしてもシグナムの攻撃は止まらない。

「はあああああっ!!!!」

「当たらなければどうという事はない!!」

と言いつつ本当に当たるか当たらないかの境目で、  
いつ攻撃を当てられるかビクビクしていた。

「また逃げ腰になっているぞ! たあっ!!」

逃げ腰じゃない! 逃げているんだ!!

……威張って言う事じゃないけどね」

「ちくしょう……かわすだけで精一杯なんだが……」

「ならおとなしくやられる！」

「だけど！それでも！守りたいもの（一人の入浴時間）があるんだ  
ああ　　っ！！」

こんな感じで勝負は大体昼ぐらいまで続いた。

ずっとかわしたり、木刀振り回したりで動きまわっていて体力の限界だった。

……えっと？朝から始めたから……計5時間もやったのか

「そりゃ……ぜえぜえ……疲れるよな……ぜえぜえ……」

「何を、言っている……はあはあ……私は……まだ、やれるぞ  
はあはあ」

息切れ起こして何言ってやがりますか。

無理しないで休めよ……その間に一発かますから

「ていうか、何で俺ら、こんな事、してるんだっけ？……はあ」

「それは……何だったろうか？」

お互い忘れたらしい……ホントに何で勝負してたんだっけ？  
意識が朦朧として思い出せない。

「元兄いゝ、シグナムゝ、お昼出来たでゝ」

うゝんと唸っているとはやてがナイスタイミングでお昼を知らせてくれた。

「おお！今行くゝ」

とりあえず何が原因か思い出せないが終わろうぜ？」

「そうだな。主も呼んでいる事だし……」

そんなこんなで俺とシグナムの勝負は幕を閉じた。

……余談だがお昼を食った後に汗を流す為に風呂に入ろうとして  
すでに風呂を入れていた事を思い出した。ついでに勝負の理由も。  
勝負の理由を思い出した俺は風呂に入らず、真っ先にシグナムに風呂を譲った。

忘れていたシグナムが思いだしてまた

「勝負だ！」

とか言わない為に。

シグナムと勝負！？なら……エスケープっ！！（後書き）

まさかのこんなオチとは……

もっと面白いオチを考える事に専念したいっす（T・T）

ではこんな駄文を見ていただいてありがとうございます！

感想や指摘がございましたらどんどんくださいm（- -）m

料理にチャレンジ 作るのは殺人シェフ!? (前書き)

ケータイで書いたので変かも知れません。

とある事が終わり次第、編集します

料理にチャレンジ 作るのは殺人シェフ！？

「……………」

あつ、どうも

八神家のお兄ちゃん、青柳元春です

実はですね？とある人が料理がしたいと言い出したので  
みんなが散歩に出掛けた時に作らせてみました。

見た目は普通で美味しそうだった。

そして俺が試食してみたんです。

そして……………」

「あれ？俺の体が何でそこにあるの？あはははは……………」

「大変！元春くんが白目を向いて眩きだしちゃった！」

シャルさんが何か言ってる……………」

あゝ、ちよつと体が軽くなった気がする……………」

何でこうなっただろう？

ただシャルさんに目玉焼きを作ってもらっただけなのに……………」

なんとかシャルさんに介抱され、なんとか二度目の人生終了は免れた。

マジでどうやったらあんな目玉焼きが作れるんだ……………

「ごめんなさい。元春くん……………」

「大丈夫です。まだちょっとクラクラするけど……………」

悪気はないんだよな……………

でも料理ヘタの域を越えてるのが怖い……………

「私……………料理向いて無いのかしら……………」

悲しそうに俯き、シャルさんが呟く。

……………料理してる時のシャルさんは楽しそうだったから  
止めさせたくはないんだよなあ……………

よしっ！

「特訓しましょう！」

「えっ？」



シャルさんが顔を上げ、俺に涙目で視線を向ける

なんでも興味を持つのは良いことだ。

それをヘタだからという理由でやめるのは勿体無い。

「ヘタだからってやめるのは駄目だと思いますよ？

ならいつそのこと頑張ってそれでも駄目なら諦めましょう？ねっ？」

俺は笑顔で手をさしのべる。

「でもそれじゃあまた元春くんが……………」

「大丈夫です。その時はまたシャルさんが介抱してください……………」

ホントは怖いけど

少しくらいは体を張って手助けしなきゃ！

「あ、ありがとう」

シャルさんは微笑んで、俺のさしのべた手を掴んだ。

……………これは頑張らないとな……………

俺は覚悟を決めてキッチンに身を投じた。

「……………」

「……………」

「うはあっー!」

「きゃああああ!元春くん!」

な、何故だっ!!

となりですつと見ていたが変なものは入ってなかったはずだ!!  
なのに…………玉子焼きがすごくマズい…………

「まだだっ…………まだ俺は気絶しちゃいない!」

「元春くん……………」

「さあ、作るんだ…………諦めずに……………」

「……………わかったわ。

死なないでね……………」

死んでたまるか…………

こんな事で俺は死なないっ!

それから俺は何度も玉子焼きを食べ、死にかけた。

その度にシャルさんに介抱され、命を救われた。

シャルさんは何回か諦めようとしたが……

「自分がやって楽しいことをできないからって投げ出すのは駄目だ」  
と、説得し続けチャレンジさせた。

「できました……………」

そして最後の卵を使った今までのと形が同じ玉子焼きが運ばれてきた……………」

玉子焼きを目の前にし、今度は大丈夫か？と不安になってしまっ……………」

そんな覚悟で大丈夫か？

俺の中の何かが聞いてきた気がした。

……………」 答えは決まってるだろ？

こんな質問が来たときの答えは……………」

「大丈夫だ。問題無い。（パクッ）」

俺は玉子焼きを口に含んだ。

「……………」

「……………」

「……………あ、美味い……………」

「ホントにつ！？」

今までの玉子焼きと違い、  
普通に美味しい玉子焼きだった。

俺はガツガツと平らげシャマルさんに一言

「ごちそうさまでした」

作ってくれた人への感謝の言葉を告げた。

「上手くいったみたいで良かったわ」

「諦めなくて良かったでしょ？」

特訓が終わった後、

俺達は使ったものを片付けていた。

俺が美味しいと言ってから

シャルさんはずっと笑顔だ。

「そうね、ありがとう！元春くん！」

良かった。

シャルさんに好きな事ができて本当に良かった。

「ただいま」

おっと、はやて達が帰ってきたようだ。

「んじゃ、俺は部屋で寝てるから。」

はやて達に玉子焼きを作ってやってみれば？」

「うん。そうしてみるね」

シャルさんの返事を聞いて俺は部屋に向かう。

向かう途中ではやてに

「疲れたから部屋で寝てるよ」

と告げて、部屋に向かった。

部屋に着くと俺は口直しに買っておいたTO？POを食べる。

「……………あれ？」

……味が………しない？

おかしいな？と思い、もう一口

………やっぱり味がしない………

………何故だ？

考えるとある説が思い浮かぶ。

もし、シャルさんの料理を食べ続けて味覚が麻痺していたとしたら？

「っ！はやて達が危ない！！」

俺は部屋を飛び出し、  
居間へと向かう。

「元春くん………みんな、私の玉子焼きを食べたら倒れちゃった………」

居間に急いで入ると  
シャルさんは涙目になり、  
みんなはテーブルに突っ伏していた。

「………はあ………」

俺は色んな事に呆れ、  
ため息しかでなかった……………

その後、シャマルさんは料理をする事を禁じられてしまった。

はやて曰わく

「キッチンに入れなくなるより増やろ？」  
とのこと

……………可哀想すぎるので、はやてが留守の時にでも  
一緒に作るうと思う。

とりあえず、ひどい目にあった

今日だった……………

料理にチャレンジ 作るのは殺人シェフ!? (後書き)

読んでいただきありがとうございます!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5619v/>

---

魔法少女リリカルなのは 転生したのはスピリット！？

2011年11月30日15時47分発行